

遺品整理 高まる需要

専門資格取得者も

無縁社会進み

遺族などの依頼を受け、遺品整理を代行する「遺品整理士」への需要が県内でも高まり、「遺品整理士」の資格を取得して業務を請け負う人も出始めた。核家族化などで孤立して暮らす高齢者が増える中、新たな社会ニーズとして注目されつつだ。

(加藤哲大)

津幡町を拠点に、主に北陸3県で展開する「東南サ」(43)は、自身の祖母が亡くなった際、会社員として仕



「遺品整理士」の資格を取得し、業務にあたる別司さん(県内で、別司さん提供)

事しながらの遺品整理に、1年もの時間を要した苦労から、「ビジネスになるのでは」と創業を決めた。現場では、家具の処分や遺族への引き渡しのほか、遺族の依頼で契約書などの書類を探したりもする。「故人に借金があっても、遺族が相続放棄できるのは死後3か月以内など、一般にはなじみのない仕組みがある」と話す。

怪しい商売と受け止められた時期もあり、「少しでも安心感を与えられれば」と、今年5月に遺品整理士の資格を取得。依頼は年々増え、社員8人となった現在は「月に10件程度が精いっぱい」だが、それを上回る依頼が入るといふ。

依頼主は同居していない家族が多い。需要の背景には、仏壇やタンス、大型

家電などの処分が物理的に大変というだけでなく、離れた場所に住む親族にとっては、何度か通って整理を続けるのは負担が大きいという事情もあるようだ。

別司さんは5年ほど前、福井県で独り暮らしの高齢女性の部屋を、成年後見人からの依頼で請け負った。

夫と離婚し、息子たちとは疎遠で交流が途絶えていたという。仏壇の前に家族4人がそろった色あせた写真を見つけ、「人生で一番幸せな時だったのでは。それが、こんな最期なのかと、あまりの差にやりきれなく

なった」と振り返る。

「遺品整理を他人に任せるのは、ある意味、残念な事なのかもしれないが、依頼があるのは事実。時代に必要なとされていると感じる」と、複雑な胸の内ものぞかせた。

「遺品整理士」を認定する社団法人「遺品整理士認定協会」(北海道千歳市)によると、「高齢化や無縁社会が叫ばれる昨今、遺品整理への需要は高い」という。資格認定を始めた昨年11月以降、全国で412人保有(9日現在)しているが、県内は4人。不法投棄

や高額請求を行う悪質な業者も存在するといいい、同会は「業界健全化を働きかけたい」としている。